

## 翻訳にあたって

この冊子はHIVと共に生きて2003年に亡くなったポール・マックロリーに捧げられています。彼は HIV陽性者の自助グループを立ち上げ、仲間の声が無視されることなく医療や保健サービスの現場とエイズ対策に反映されるよう果敢に挑戦し続けた人でした。

2000年に実施されたHIV陽性者のニーズに関する全国調査と面接調査をもとに作成されたこの冊子は、HIV陽性者の抱えるニーズを丁寧に網羅して整理したものです。ここにはドラマティックな個人的ストーリーはありません。たんたんとした冷静な記述が続きます。しかしだからこそ、日々生きていくというのはいかなることなのか、という基本的なことが浮かび上がってきます。なぜなら、朝起きて、食べ、学び働き、友とつきあい家族と暮らし、社会と関わり、寝る、そしてまた起きる …この当たり前で確実に繰り返すと誰もが疑わないことが、実は自明でもなく保障もされていない。このことは言われれば頭では理解するけれど実感にはなりにくいことでしょう。けれど HIV陽性者は、感染告知の瞬間からずっと、この不確かさと向き合い、いやでも実感させられることになるのです。しかもそこに感染という個人的要因以上に制度や偏見などの個人の力を超えた社会的文化的要因が深く関わってくるのです。

HIV陽性者のニーズ、その全体や個別の多様な側面と関係性を理解することは、HIV陽性者のためにサービスを提供する側だから必要だというだけでなく、生きるためのニーズとその複雑さと脆さとを誰もが潜在的に共有しているのだということ認識することでもあるはずです。

これは簡単なことではありませんが、その強力なテキストのひとつがこの冊子だと思います。この冊子はイギリスで作られましたが、人が生きていくことという基本の姿に国境はありません。日本でも広く利用されることを願い、著者ウイル・アンダーソン、発行者ナショナル・エイズ・トラスト（NAT）に深く感謝します。

厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業  
地域におけるHIV陽性等支援のための研究  
研究代表者 生島嗣